

つながりが生み出す成長と活力

千代田区立四番町図書館 館長 栗田 孝子様

私はいま千代田区立四番町図書館で館長として働いています。図書館というと公務員と思われる方が多いのですが、現在、公共図書館の多くは指定管理者制度を導入していて、民間企業が管理、運営を担っています。それにより様々な人材が登用される機会が生まれ、私もその一人というわけです。



高度成長にのって育った私は、大学で広告を学び、将来は広告代理店で企画制作に関わる仕事をしたいと思っていました。ところが、卒業を控えた1973年に第4次中東戦争が起こり、世界経済を揺るがすオイルショックに突入。企業は軒並み新規採用見送り、広告代理店も例外ではありませんでした。特に4大卒の女子は（会社についていっても居残られそうと）敬遠され、門前払い、といった状況でした。男女雇用機会均等法ができる10年前、女子は受付、お茶くみ、早く寿退社して新陳代謝を保つのが企業の常だった頃の話です。そんなとき、「雇用することはできないが、フリーランスとして仕事をすることはできる」と、ある出版社のジュニア雑誌編集長に声をかけられ、編集の道へ。「この仕事に一度足を踏み入れると、その魔力から抜けられないよ」という囁きに、なぜか心を沸き立たせてしまったのです。不確実な時代だからこその冒険心だったのかもしれませんが。

女性誌の編集ライターの仕事に就き、学んだことは、人との出会い、つながりを大切にすることでした。新しい出会いが次の出会いにつながり、発想が広がる。一話完結ではないこの仕事に魅了されていきました。もちろん、かなり荒っぽい扱いも受けましたが、新人を早く一人前にしてやろうと、育ててくれる環境があったことは幸運でした。そして、私自身を含めて女性の底力を実感したのもこのときで、後に女性だけの編集プロダクションをつくるきっかけとなりました。

一通りの仕事を経験し、60歳で一個人に戻って、興味関心のままに活動していたところ、「図書館で館長をやってほしい」と、声が掛かりました。自由度の高い出版の世界と対極にある公共の世界は私にとっては魔界のようなものでしたが、そこにまた怖いもの見たさの誘惑を感じてしまったのです。さらに、「今までの経験を生かして新しい風を吹かせてほしい」と説得されたことも私の背中を押しました。

本に囲まれた空間は、背表紙を眺めているだけで想像力が沸き立ちます。図書館は調査研究のために訪れたり、小説や趣味の本を探す場というだけでなく、目的もなくふらっと訪れ、目についた本を手取る…。そんな偶然の出会いには、宝探しのようなわくわくする面白さがあります。ところが、外側から図書館を眺めてみようと、区内のいろいろなところに顔を出して聞いてみると、図書館を利用したことがない人が多く、「子どもが小さい頃はよく行っていたけれど」という過去形の声も。

扉を開いて待っているだけでは、素通りされてしまう。民間なら集客に対して企業努力するのは当然ですが、公共図書館はルーティンを粛々と…、そんな印象を持ったのです。

図書館で働き始めて驚いたのは、ルールの多さでした。メインとなるのは図書資料の貸出と返却という業務ですが、接遇マナー、個人情報管理、苦情対応に至るまで、細かいマニュアルが設定されているのです。小さなことがクレームに繋がり、ときには罵声を浴びせられることもある。その対応策というわけです。「クレームを出さない」ことが目的になると、どうしても新しい試みには消極的になります。このことが、チャレンジしてもしなくても、評価は変わらない…という空気を生み出しているのではと感じました。

図書館をだれもがふらっと立ち寄れる場所にしたいという思いから、図書館の前例を見直し、いろいろなイベントを試して、来館者の反応をチェックしてみることにしました。思った以上の集客があったものもあれば、その逆もありましたが、どちらも次に繋げる貴重なデータとなります。そのヒントが見えてきたころ、コロナによる自粛生活が始まりました。その影響を一番受けるのは子どもたちです。特に、乳幼児の1年、2年のブランクはその後の生育に大きく影響します。そこで、「マスクをしてもイベントは続ける」決断をしました。図書館では密になるため、外の会場を探していたところ、神保町のブックハウスカフェに行き着きました。いままで民間の施設でイベントを開催する前例はありませんでしたが、ここであきらめてしまうと、これが前例になってしまうと思ったのです。ブックハウスカフェでイベントを開催したことで、新たなつながりが生まれました。ここは、絵本作家、出版、図書館関係者など、魅力あふれる人がふらっと訪れ、交流が始まる場所。図書館にもぜひ生かしたい場づくりのお手本です。常に新しい出会いが生まれ、広がっています。

公共図書館にはまだまだ高いハードルがありますが、さまざまな人との出会いを活力にして、乗り越えていきたいと思っています。

